

47 超低視力者の視機能評価

—The Berkeley Rudimentary Vision Test を用いた評価結果について—

リハビリテーション部ロービジョン訓練

三輪まり枝 岩波将輝 山田明子 西脇友紀 林 知茂 仲泊 聡 西田 朋美

【目的】

現在の一般眼科臨床において、視力が 2.0logMAR 値（小数視力 0.01）未満の超低視力の評価は、指の本数を数える「指数弁」、その判別ができない場合には手の動きを確認する「手動弁」、その確認ができない場合は光の判別がつくか否かの「光覚弁」および「光覚弁なし」という評価となっており、それらは定量的な評価がなされていない。

今回我々は、視力検査において一般的に用いられている「ランドルト環」視標では定量できなかった指数弁以下の超低視力である被験眼に対し、The Berkeley Rudimentary Vision Test（以下 BRVT）による評価と、ゴールドマン視野計（以下 GP）による視野測定を実施し、超低視力者の視機能評価について検討したので報告する。

【対象と方法】

対象は、指数弁以下の患者 52 名 70 眼で、視力の内訳は、指数弁 17 眼、手動弁 43 眼、光覚弁 10 眼だった。全被験眼に対し、BRVT による視力測定と GP による視野測定を行った。BRVT では Single Tumbling E Card-pair および Grating Acuity Card-pair 視標を用いた logMAR 値による視力評価を行った。

【結果】

1. 超低視力 70 眼は、BRVT で logMAR 値での定量が可能であった群（以下、BRVT logMAR（+）群）34 眼（48.6%）と、BRVT において定量が不可能であった群（以下、BRVT logMAR（-）群）36 眼（51.4%）に二分された。
2. BRVT logMAR（+）群 34 眼の視力の内訳は、指数弁 17 眼すべてと手動弁 43 眼中 17 眼（39.5%）だった。BRVT logMAR（-）群 36 眼の視力内訳は、手動弁 43 眼中 26 眼と光覚弁 10 眼のすべてだった。
3. 視野は、BRVT logMAR（+）群 34 眼すべて GP V4-e 視標による測定が可能だった。BRVT logMAR（-）群 36 眼の視野は 33 眼（92%）が測定不能であり、両群の測定できた割合は有意に差が認められた（ $p < 0.001$ ）。

【結論】

ランドルト環で定量が不可能であった指数弁以下の超低視力 70 眼の中に、BRVT の評価では視力の定量が可能であったものが 48.6%（34 眼）存在し、それらは全眼とも視野測定もできていた。

超低視力であっても BRVT および GP による評価により、定量的な視機能評価が可能であることが示唆された。